

万葉集と考古学

坂 誥 秀 一

(1) 考古学研究と万葉集

『万葉集』20巻には約4500首の歌が収録され、古来、古典文学の白眉として研究が山積し、「万葉学」の成果は、まさに汗牛充棟と言える。収められた歌は、文学作品ではあるが、詠人の心象風景が投影され、ヒトと地域が織成す歴史的風景がヴィヴィットに描写されている。万葉学者のみでなく、歴史家にとっても垂涎的な対象史料である。

古く『萬葉集講座』第2巻（昭和8年）・「研究方法篇」におさめられた後藤守一「建築・武器・武具・家什」と尾崎元春「服飾」、西村真次『萬葉集の文化史的研究』（昭和9年）は、歴史的な視点から展望を試みた労作として知られているが、必ずしも考古学的視点によって論じられたとは言えなかった。

万葉集を考古学の視点と方法で論じ研究されるようになった契機は、樋口清之による問題提起を承けて見解を披瀝した大場磐雄による「万葉考古学」の成立可否論である。

樋口は「万葉考古学序説」（『國學院雑誌』55-2、昭和27年）において「万葉考古学とはそれ自体万葉集の包含する時代と地域の古代文化を究めようとする日本考古学の一分科を指す」と論じ、「万葉考古学」の成立を主張された。それに対し大場は「万葉考古学的考察」（『万葉集大成』第8巻、昭和28年）、「万葉集の考古学的研究」（『万葉集講座』第3巻、昭和29年）において、とくに際立った研究方法の提唱もないため「広い意味の

歴史考古学の一部門としてさしつかえない」と喝破されたのである。「万葉考古学」論は、その後、「古典考古学」の一つのテーマとして理解されるようになっていった。

「古典考古学」は、かつて大場磐雄によって存在の必要性が説かれ、「大場磐雄著作集」の第5巻は『古典と考古学』（昭和51年）とされたのであるが、その根底には、かつて「万葉集の内容には時代と地域、登場人物とその思想といった各種の限定が、豊かな背景を作ってくれているので、もしこれを考古学の対象とするならば、当然“古典考古学”とでも称すべき一部門が考案されねばならない」との主張があったからである。

他方、原田大六は、『万葉集発掘—考古学による万葉解説—』（昭和48年）、『万葉集点晴』巻1、上・下（昭和49・50年）を公にしたが「前人未踏」の成果の集大成がなされずに長逝したことは惜しまれる。

森 浩一は、主宰する『古代学研究』94（昭和55年）に万葉集の特集を編んだ。ついで、それを核として新たに『万葉集の考古学』（昭和59年）と題する一書を編み、万葉集を考古学の立場で研究の対象とすることを具体的に提起したのである。

万葉集を考古学において対象とするとき、どのような遺跡・遺物が存在しているか、については、すでに大場によって列記されたことがある。ただそれは考古学で対象としているものの例示にとどまっていた。森は、1・万葉集の舞台、2・万葉人と風土、3・万葉の歴史的環境、4・海人の活躍、5・万葉人の生活、6・万葉人の技術、7・

万葉人の精神、に大別し、考古学をはじめ、文献史学・文化人類学分野を専攻する人びとの協力をえて、新しい万葉集研究の出發を宣布したのである。

一方、寺村光晴は「文学と考古学—その学際研究への試論—」（『和洋国文研究』18、昭和57年）などにおいて、とくに文学と考古学との接点研究には学際研究の必要性を強調したことは、今後における古典の考古学的研究において看過することの出来ない提言であった。

また、斎藤 忠は、「日本考古学の研究に日本の古典を活用する」観点から「日本古典考古学」を提唱している（日本考古学研究1『古典と考古学』昭和63年）。そして、『古事記』・『日本書紀』・『風土記』・『万葉集』・『古語拾遺』・『今昔物語』・『日本靈異記』などを対象として個別研究を試みたのである。

万葉集を考古学の視点で研究する方向については、以上のごとく多くの先学諸氏によって試みられ“万葉学”の一端を形成してきた。しかし、文字で表されたココロを、モノによってヒトの行動を研究する考古学の立場で検討することは難事である。そこで一つの試みとして、古代の「道」を念頭に、ヒトと地域のかかわり方について触れることにしたい。

（2）万葉集東歌・防人歌と考古学

『万葉集』巻十四の「東歌」と巻二十 収録の「防人歌」は、東国地域における古代研究の重要史料である。従来「万葉集東歌」として親しまれ、多くの人びとによって、その紀行が果たされてきたが、それはあくまで詠まれた比定地の検討によるものであった。

近年、古代と東国における考古学的発掘調査が進み、律令官道のあり方が具体的に把握され、従来、地形と地名と伝承によって考えられてきた

「道」の実態が明らかにされてきている。

古代官道の設置は、政治・経済・軍事上からの必要性にもとづいたものであったが、「道」はヒトの往来、情報とモノの流動の動脈として歴史的に大きな役割を果たしてきた。それは中央政権の情報伝達をはじめ、税と軍事にとって不可欠の存在であった。歴史上きわめて重要な「道」の研究は、文献史学・歴史地理学の分野によって地域ごとに究明され、それぞれ成果が挙げられてきたが、「道」そのものについての調査は遅れていた。律令官道の幅は2～3mくらいであったであろう、との見解が古代交通史の概説書にも示されてきたことにもよく示されている。

「道」の考古学的研究は、中央の宮都とその付近においては歴史地理学の成果をもとに試みられてきたが、発掘調査によってその全容を顕現するにはいたらなかった。律令官道の実態は、東海道・東山道において考古学的発掘が実施されたことを切っ掛けに、全国的に「道」の究明が試みられるようになった。

近年における日本考古学の大きな成果の一つとしてもよいであろう。かかる成果は、関連分野においても注目されている。

律令官道は、発掘調査の結果幅員12～9mを有し、側溝によって確保されていたことが一般的であることが知られ、道路面は踏み固められた痕跡が把握されることが特徴的である。また、一直線を呈していることが原則である。それは目的地に対する最短距離の設定が重要であったことを示している。ルート上の障害は、削平し、架橋し、あくまで一直線を至上の目的として造られたことが察せられるようになってきた。

7世紀の後半以降、諸国の国庁を結んだ「道」は駅路、国内の郡庁を結んだ「道」は伝路と呼ばれ、それぞれ“駅館”が設置され、組織的な駅制が機能していたことが明らかである。

このような状況を踏まえて、古代東国について

考えるとき、「道」のあり方がそれぞれの地域の歴史にとってきわめて重要であることを改めて認識することができる。

『万葉集』の「東歌」及び「防人歌」の詠人は、実際に律令官道を歩んだのであろうか。とくに防人の場合は如何であったろうか。

以上の認識に立脚して、東山道の「武蔵往還路」を辿った“武蔵国”出身者、もしくは“武蔵国”と関係が深かった詠人の歌を通して若干の検討を試みることにしたい。

古代武蔵国は東山道であったが、宝亀二(771)年十月に東海道に所属替えになった。東山道は、上野国の新田駅より下野国の足利駅に至っていたが、その間、上野国の邑楽郡より南下して5駅を経て武蔵国に達し、また、武蔵国より北上して下野国に通じていた。上野国→武蔵国→下野国のルートであったと言える。しかし、かかるルートは、公使繁多のため、東山道より東海道に所属を替え、相模国→武蔵国→下総国ルートの東海道に編入されたのである。ただ、上野国→武蔵国→下野国のルートは、宝亀以後に於いても頻繁に往来があったことは天長十(833)年五月に「多麻・人間両郡」の界に悲田処が設置された記録によって明らかである。上野国→武蔵国→下野国の「道」は、武蔵往還路であった。

東歌で武蔵野を詠った歌は次の通りである。

- 3374 武蔵野に占へ象焼き現実にも告らぬ君
が名占に出にけり
- 3375 武蔵野の小岫が雉立ち別れ去にし宵より
背子に逢はなふよ
- 3376 恋しけは袖も振らむを武蔵野のうけら
が花の色に出なゆめ
- 3377 武蔵野の草は諸向きかもかくも君がま
にまに吾は寄りにし
- 3379 わが背子を何ども言はむ武蔵野のう
けらが花の時無きものを

この5首のほか、

3373 多麻川に曝す手作さらさらに何そこの
兎のここだ愛しき

3378 人間路の大家が原のいはる蔓引かばぬ
るぬる吾にな絶えそね

の2首も、武蔵野について詠んだものと推察することができる。したがって、3373~3379の7首が武蔵野に関する歌と言えるであろう。7首に共通して詠まれている地域は、田辺幸雄氏が前5首について指摘されているように「武蔵国府に近づいたあたりのもの」であり(『萬葉集東歌』昭和38年)、それに後2首を加えることにより蓋然性が増し、人間付近を北にして南の多磨、武蔵国府あたりについて詠んだ歌と考えられるであろう。

その配列について憶測を加えれば、南の武蔵国府の近くで詠んだ3373から北の人間郡域を詠んだ3378の順序をもとに3380(埼玉の津に居る船の風を疾み綱は絶ゆとも言な絶えそね)にいたる配列を看取することもできよう。さすれば3381(夏麻引く宇奈比を指して飛ぶ鳥の到らむとそよ吾が下延へも)も3380の近くで詠まれたものと考えられ、以上の9首は「武蔵国の歌」であり、意識的な配列を推考することができるのである。

このように考えてくると、武蔵国の9首は、武蔵国府から一直線に北進する東山道武蔵路(駅路)、もしくは「本道〈駅路〉と分岐道〈伝路〉」の情景表現として想起されてくる。それは宝亀二年十月以前の東山道武蔵往還路のあり方と関係していたことも考えられよう。なお、3378が天長十年五月に悲田処が設置された以前か以後については詳らかではない。いずれにしても、東歌中、武蔵国を詠んだ9首は、武蔵国が東山道に所属していた宝亀二年以前のものとすることもできるであろう。

7世紀の中頃以降、武蔵国から徴収された防人の歌が『万葉集』巻二十に12首がおさめられている(4413~4423)。この防人歌をみると、

4417 赤駒を山野にはがし捕りかにて多摩の
横山徒歩ゆか還らむのごとく、多摩川

- 左岸に設置されていた武蔵国府の南を
渡河した右岸の“横山”とか、
- 4421 我が行きの息づくしかば足柄の峰延ほ
雲を見とて偲はね
- 4423 足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹
はさやに見もかも

にみえる“足柄”の峰と坂、のような地名が詠みこまれている。わずかの例ではあるが、その情景は、武蔵国府の北方域ではなく、南方域を示している。それは宝亀二（771）年十月以前に東海道武蔵国と相模国との間に明らかに「道」が通じていたことを示している。天平宝字元（757）年八月には、東国防人の徴収が停止されるが、防人歌が集められた天平勝宝七（755）年二月の時点においては、武蔵国は東山道であり、防人歌に示されているように多摩川を渡河し南に向う「道」の存在が注目されるであろう。それは、東歌の武蔵野を詠んだ情景と異なっていることが知られる。そこには、上野国→武蔵国→下野国の律令官道（駅路）とは別の「道」の存在を考えることができよう。そして武蔵国府と橘樹郡・都築郡（さらには荏原郡）とを結んでいた伝路のルート存在の考慮である。防人達は、東山道に属していながら、東海道を抜ける直近のルート（伝路か）を通過して南に向い、そして東海道を経て西国に向ったのではないかと推考されるのである。

（3）東山道武蔵路の駅

東歌に収められた詠人は、東山道武蔵路の存在に思いを馳せていたことであろう。上野国→武蔵国、そして武蔵国→下野国については「上野国邑楽郡より五ヶ駅を経て武蔵国に到り、事畢りて去る日、又同道を取りて下野国へ向ふ」（『統日本紀』神護景雲二（768）年三月乙巳の条）、と見えていることから、5つの駅が存在していたと考えられる。

駅については、「長屋王家木簡」の
武蔵国□□郡宅□駅菱子一斗五升
霊龜三年十月□□（716）
の検討によって「□□郡」は「策覃郡」、「宅□駅」は「宅子駅」であろう、とする見解が公けにされている（寺崎保広「長屋王家木簡郡名考証二題」『文化財論叢』Ⅱ、平成7年）。

他方、東の上遺跡（埼玉県所沢市）の発掘は、東山道武蔵路の検出、周辺における遺構群の状況、馬関係遺物の出土により、「駅」と考えられている（根本端「所沢市東の上遺跡の性格について—「官衙的遺構」を中心として—」『埼玉考古』37、平成14年）。

「宅子駅」は、埼玉県行田市忍町大字谷郷に比定され（寺崎保広「前掲」平成7年）、駅名は不詳であるが「東の上遺跡」が「某駅」と考えられるとすれば、5駅のなかで2駅の位置がほぼ推定されたことになる。

3駅については、現在のところ分明にされていないが、武蔵国分二寺の北方に位置している「恋ヶ窪遺跡」の存在が注目される。この地からは、礎石を伴う瓦葺の建物と掘立柱の遺構が発掘され、武蔵国分二寺出土の瓦当と同范の鍍瓦などが出土し、“恋ヶ窪廃寺〈廃堂〉跡”と呼ばれてきた。武蔵路の西方に位置しているこの「恋ヶ窪遺跡」は、恐らく5駅中の「某駅」の一つに該当するのではあるまいか。恋ヶ窪の地は、江戸時代に「往古の官道にて、府中に出る駅次なり（中略）、〈恋ヶ窪〉村の中程より少し南の方に当りて、往昔の駅舎の跡とて古瓦など多く畠中より掘りだすことあり」（植田孟縉『武蔵名勝圖會』文政6年、刊行は天保7（1836）年）と見え、後の鎌倉街道（上つ道）もこの地を南北に走っている。

恋ヶ窪遺跡は、すでに消滅しているが、以前、滝口宏・宇野信四郎などによって一部が発掘されたことがあり、出土資料も現存している。今後、改めてこれらの資料を検討することが望まれるが、

ここでは、忘失の「某駅」の一つに比定したいと考えている。

この地は、武蔵国の国府の北方に建立された武蔵国分二寺の北方に接する台地上の平坦地に占地していることは注目されるであろう。武蔵国分寺と同範の瓦葺建築の施設こそ、東山道武蔵往還路から武蔵国の政治的・文化的な中枢地域を扼する重要な「駅」的機能を有したものであったことを察することができよう。

中路の東山道には、「駅馬十疋」が配されていたことが考えられるが、武蔵往還路の5駅も同様

であったと言える。駅間は、ほぼ「三十里」（約16km）であり、今後、如上の駅の手掛りをもとに5駅の位置を考えていくことが期待されるのであり、ここでは、東歌武蔵国の舞台であった武蔵往還路をめぐる一つの問題について触れるに止めておきたい。

今後、武蔵往還路のルートの復元を考古学的視角に立って考えることが必要であり、かかる方法こそ、「万葉学」にも新しい視点を提示するのではあるまいか、と私考している。